

未来展望の発達傾向とその関連要因の検討

杉 山 成

青年期は時間的展望に関して深刻な変化のおこる時期である。この時期には、自分自身の理想目標や価値と、他方の期待の現実構造が考慮されなくてはいけない現実という両方に一致するような形で時間的展望を構造化することが要請される（日高・吉田，1980）。そして、個人のライフコースにおいて決定的な役割を果たすような展望の形成はこの時期に主に行われると考えられており、それゆえ青年期の時間的展望を検討することは、時間的展望の形成過程や現在の行動への影響を検討する上で決して欠かすことのできない中心的なテーマであると考えられてきた。

時間的展望の概念を自身の場の理論に位置づけた Lewin (1942) は、児童期から青年期にかけての未来展望の発達に関して、年齢と共に時間次元のスコープが拡大し、遠い未来と過去が現在の行動に影響を及ぼすようになり、現実-非現実の次元が分化するようになると主張している。しかし、Lewin 自身はこうした見解を検討するための実証研究を行ってはおらず、実証的な研究はその後の研究者によって、特に時間的展望の未来的側面である未来展望をめぐって、次のように行われている。

未来展望の広がり まず未来展望の広がり (extension) の側面に関して、Klineberg (1967) は、10才から17才の被験者を対象に、6つの指標 (TAT, イベントテスト, 関心事テスト等) を用いた検討を行っている。その結果、適応的な個人においては、児童期から青年期にかけて遠い未来への関心を増していくという傾向を確認し、それが新しい役割期待, 形式的操作の獲得, そしてポジティブな自我同一性の形成という要因に基づくことを指摘している。このように上述の Lewin の見解と一致する結果はラインテストを用いた Shannon (1975) においても確認されている。

一方、そうした結果と対照的に、年齢と共に未来展望が狭くなることを指摘する研究も存在する。例えば、Trommsdorff, Lamm & Schmidt (1979) は、自分達の未来展望の定義に基づく未来志向性質問紙(Future Orientation Questionnaire: extension, density, optimism 等、複数の次元の未来展望を測定する)を作成し、14才から16才の48人の男女に対する2年間の縦断的調査を行っている。この結果では、未来展望の広がりには男子のパーソナリティ、自己実現の領域で広がっただけで、その他の職業や個人的発達に関する領域では減少する傾向を示した。同じ質問紙を用いて横断的調査を行った Segner (1992) においても年齢の上位の被験者の未来展望の広がりが最も短いという結果であった。

こうした未来展望の広がりが短くなるという発達の傾向に関しては、直接的な満足を重視する若者文化の影響 (Cottle & Klineberg, 1974) や、青年期の移行に伴う関心事の変化 (Segner, 1992) が想定されている。しかし、上述の研究のようにイベントテスト等による年齢を指標とした研究においてこの現象が特徴的にみられることを考慮すると、こうした年齢指標が個人の認知している「標準的なライフサイクル (Neugarten, 1977; 望月・中島・大根田, 1992)」¹⁾を反映しているためである可能性も推測されよう。例えば、白井 (1985) は、本邦における小学、中学、高校生に対してイベントテストを行っているが、最も遠い未来のイベントまでの距離が年齢と共に増加する傾向を示した一方で、一般的に用いられる未来展望の広がり指標 (イベントの年齢の平均) は年齢と共に減少する傾向を示していた。これは青年期の未来展望が、教育期間を初めとする「標準的なライフサイクル」を中心に組み立てられているために、年齢の上昇と共にそうした標準的なイベント (高校、大学の卒業や結婚、就職等) までの時間的距離が結果的に短くなってい

1) Neugarten (1977) によれば、「社会が個人に用意した社会化の枠組みであり、年齢にふさわしい行動様式をとることを個人に期待し、個人に要求するもの」である。

くことが一因と考えられる。このように、本来、個人の生活空間の未来次元への広がりとしては、Lewinの仮説通りに（年齢以外の指標を用いた研究でみられるように）年齢と共に上昇するのであるが、未来のイベントの平均を指標とした場合では、標準的なライフサイクルの枠組みの影響を受けるために、結果的に未来展望の指標が短くなっているという可能性が考えられるのではないだろうか。

未来展望の内容 また、近年注目されているのは、未来展望の内容的な側面、すなわち自己の未来にどのような目標や出来事を想定しているのかという側面の分析である。この「イベント」を中心にした検討において、Verstraeten (1980) は、15才から17才までの男女にMIM (Motivation Induction Method; Nuttin & Lens, 1985) を用いて、未来の目標や動機づけの対象を分析した。その結果、それらが年齢と共に現実的になっていく傾向が示された。同様の結果はLessing (1968) においても得られている。イベントテストで測定された5・8・11年生の未来展望は年齢の上昇に伴い、空想的な内容から現実的な内容に変化した。年少の子供がより欲求充足的な空想に関わっているのに対し、年長の子供は彼らの目標を達成するための現実的な教育・職業に属するステップに焦点を当てていることが確認された。こうした結果は、未来展望の現実-非現実の次元が年齢の関数として分化するとした先述のLewinの見解と一致するものであるといえよう。

未来に対する感情的態度 未来に対してどのような態度を持っているのかという側面に関して、Bjurwill (1985) は、スウェーデンの5, 8, 11年生合計900人に対して未来についての態度をSD法で測定した。その結果、年長の被験者は年少に比してネガティブな態度を示していた。

本邦においてはほとんどこの分野の検討はなされていない。しかし、類似した内容を問う項目を用いている研究として、白井 (1985) と西田 (1976) を挙げるができる。白井 (1985) では、小・中・高校生に「自分の未来の明るさ」についての評定を求めた。そして、この回答から判断する限り、児童期・青年期において年齢の上昇とともに未来を漠然としたもの、また暗

いものとして認知される傾向が確認される。同様の現象は西田(1976)が行った高校生に対する調査においても確認され、未来への不安感情が高校3年間で増加していくことが報告されている。このように、本邦では欧米とは異なり、年齢の上昇につれて未来にネガティブな態度を持つようになるという結果が示されている。

未来展望の機能の発達 このように、未来展望の発達の傾向を検討した研究では、特に広がり of 側面に関して必ずしも一致した結果が得られていないが、まだ研究自体の数が少ないことを考慮すると未だ一般化できるような段階にはないと判断される。今後、こうした未来展望の発達パターン検討のために、一貫した概念定義に基いた研究手法の採用による資料の集積が期待される。

ところで、既に示したように未来展望の広がり and 適応性の関連を検討した Klineberg (1967) は、それらの関連の様相が児童期と青年期で異なることを指摘し、その理由として青年期は未来展望が現実的であるが、児童期の未来展望は空想や願望であることを挙げている。この点に関連して、Lessing (1972) は、純粋に認知的な未来展望である「認知的未来展望(cognitive future time perspective)」と、実際に行動を動機づける未来展望である「認知-動機づけ的未来展望 (cognitive-motivational future time perspective)」を区別してとらえ、それぞれの測度における広がり of 程度と人生に対する満足度との関連の様相が異なり、それらの発達経路も異なると推測した。そして、168人の女子青年を対象とした横断的調査を行い、年齢と共に広がっていく傾向は、文章完成法による未来の事象生起の年齢を指標とした認知的未来展望ではなく、25項目の未来展望インベントリー(Heimberg, 1963)で測定された認知-動機づけ的未来展望の方であることを見いだしている。

彼女の研究に示唆されるように、青年期の未来展望は多面的な性格を持ち、それぞれの側面の発達経路が異なることが推測されるため、その広がり or 態度の発達の变化は、変数単独ではなく先行要因 or 適応変数との関連性という一つの枠組みのなかから、その機能という面でもとらえなおす必要があると思われる。しかし、本邦においてはわずかの研究において未来展望変数の単独

の発達傾向が検討されているだけであって、こうした関連要因との関連のなかでの検討は筆者の知る限りなされていない。

そこで、本研究では、青年の未来展望における各側面の発達、およびそれと先行要因としての人格変数である Locus of Control (LOC) や、現在の適応感との間の関連性に関する横断的な調査を行うこととする。杉山・神田(1996)の結果からは、動機づけの未来展望が内的統制感に基づいて構成され、現在に対して影響を与えるようになることが推測され、このことから、LOC と未来展望、そして現在の適応に関する各測度の関連が年齢の上昇につれて高くなると考えられる。

方 法

被験者 高校1年242名(男子113名, 女子128名), 2年141名(男子68名, 女子73名), 3年191名(男子90名, 女子101名), 大学生(4年次生を除く)155名(男子85名, 女子69名, 不明1名)。総数729名。

高校では2校に調査を行ったが、それらはいずれも首都圏に位置し、入学時の難易度、大学進学率などにおいて大きな隔たりはない。どちらも共学であり、いわゆる一貫高には該当せず、高校卒業後の進路に関してはほとんどが入試を経て首都圏の大学・短大に進学する。

質問紙の構成 まず、イベントテストの手法に基づいて「未来におこる重要なこと」を10個自由記述で回答させ、それぞれのイベントに関して、それが起こる年齢を回答させた。未来展望の尺度には時間的展望体験尺度(白井, 1994)のうちの「未来」に関する2尺度(目標志向性尺度, 希望性尺度), および比較のために「現在」に関する尺度(現在の充実感尺度)を実施した。また、目標に対する遂行期待を問う項目を3項目, 道具性を問う項目を6項

2) 目標遂行期待, 目標道具性期待の項目は, 尺度作成時(杉山, 1998)の因子分析でそれぞれの因子に高い寄与を示した項目を用いた。

目設定した²⁾。その他、水口 (1984) による LOC 尺度、および適応の測度として高校生には学校生活適応尺度 (高瀬ほか, 1986) を使用した。本尺度は、学習意欲・友人関係・規則への態度・進路意識・教師への態度という 5 つの側面によって学校での適応を測定するものであり、本研究では前の 4 つの側面を測定する下位尺度を用いた。これらの尺度に対する評定はすべて 4 件法で行った。

手続き 1995 年 7 月から 11 月の授業時間内、もしくは、その他の在校時間に質問紙を配布し、回答させた。

結果と考察

学校適応尺度および LOC 尺度は、因子分析の結果、1 因子性が強かった。そこで、学校適応尺度は得点が高いほど適応感が高くなるように、LOC 尺度は得点が高いほど内的統制傾向を示すように得点化した。そして、全体のデータ (学校適応尺度のみ高校生のみ) に基づいて各尺度に関する項目分析を行った。その結果を TABLE.1 に記す。

未来展望の発達的变化 報告された未来のイベントを角野 (1993) や表谷 (1994) の個人的目標のカテゴリーを参考に分類した (TABLE.2)。これによって、未来のイベントの内容の発達的变化を検討する。

まず、高校生においては就職や進学に関する記述が中心を占めており、特

TABLE.1 下位尺度得点の平均、標準偏差、および α 係数

	平均	標準偏差	α 係数
LOC (30項目)	75.26	13.68	.77
目標志向性 (5項目)	12.27	3.84	.64
希望 (4項目)	11.34	3.13	.64
現在充実感 (5項目)	11.73	3.83	.65
目標遂行期待 (3項目)	7.82	2.44	.71
目標道具性 (6項目)	16.39	4.56	.76
学校適応尺度 (24項目)	59.56	12.15	.82

TABLE. 2 未来イベントの集計

	高校1年		高校2年		高校3年		大学生	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
1, 職業								
11, 具体的な職種	18(15.9)	33(25.8)	11(16.2)	18(24.7)	27(30.0)	30(29.7)	2(2.4)	3(4.3)
12, 適職の発見	0(-)	1(0.8)	0(-)	1(1.4)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)
13, やりがい・充実	1(0.9)	1(0.8)	0(-)	0(-)	1(1.1)	2(2.0)	1(1.2)	1(1.4)
14, 出世	1(0.9)	1(0.8)	5(7.4)	1(1.4)	7(7.7)	3(3.0)	13(15.3)	2(2.8)
15, 職業生活の安定	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	1(1.1)	1(1.0)	1(1.2)	1(1.4)
16, 就職	17(15.0)	32(25.0)	28(41.2)	38(52.1)	26(28.9)	39(38.7)	70(82.4)	58(84.1)
17, 技術	4(3.6)	0(-)	0(-)	0(-)	1(1.1)	0(-)	1(1.2)	1(1.4)
18, 一生働く	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	1(1.2)	1(1.4)
19, 高収入	0(-)	0(-)	1(1.5)	0(-)	1(1.1)	0(-)	0(-)	0(-)
10, 会社創立・自営	9(8.1)	4(3.2)	2(3.0)	1(1.4)	1(1.1)	8(7.9)	9(11.2)	8(11.6)
1a, 退職	2(1.8)	2(1.6)	2(3.0)	1(1.4)	3(3.3)	2(2.0)	10(12.2)	7(10.1)
1b, 再就職	0(-)	0(-)	1(1.5)	0(-)	1(1.1)	0(-)	12(14.1)	11(15.9)
2, 学習・教育								
21, 卒業	15(13.2)	23(18.0)	15(22.1)	21(28.8)	17(18.9)	9(8.9)	37(43.5)	17(24.6)
22, 留学	1(0.9)	2(1.6)	0(-)	4(5.6)	0(-)	0(-)	2(2.4)	2(2.8)
23, 進学	37(32.7)	60(46.9)	25(36.7)	32(43.8)	30(33.3)	59(58.4)	1(1.2)	2(2.8)
24, 外国語の習得	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)
25, 資格取得	5(4.5)	4(3.2)	3(4.5)	2(2.8)	4(4.4)	8(7.9)	4(4.8)	3(4.3)
26, 自動車免許	19(16.8)	0(-)	10(15.0)	15(20.5)	8(8.8)	6(5.9)	3(3.6)	3(4.3)
27, (生涯)学習	0(-)	1(0.8)	2(3.0)	1(1.4)	1(1.1)	1(1.0)	0(-)	0(-)
28, 現在の勉強	2(1.8)	1(0.8)	0(-)	1(1.4)	0(-)	0(-)	1(1.2)	1(1.4)
29, 留年・浪人	1(0.8)	1(0.8)	0(-)	0(-)	2(2.2)	1(1.0)	2(2.4)	2(2.8)
20, 大会出場	21(18.5)	12(9.4)	11(16.2)	5(6.8)	3(3.3)	1(1.0)	2(2.4)	2(2.8)
3, 対人関係								
31, 友人・周囲の人	1(0.9)	4(3.2)	0(-)	1(1.4)	1(1.1)	0(-)	1(1.2)	1(1.4)
32, 家族	0(-)	1(0.8)	0(-)	2(2.8)	0(-)	1(1.0)	0(-)	0(-)
33, 恋愛	2(1.8)	16(12.5)	3(4.5)	13(17.8)	2(2.2)	7(6.9)	2(2.4)	3(4.3)
34, 身近な人間の死	0(-)	1(0.8)	0(-)	1(1.4)	1(1.1)	0(-)	5(5.9)	13(18.8)
4, 趣味・余暇								
41, 旅行	8(7.2)	13(10.2)	6(9.0)	11(15.1)	2(2.2)	8(7.9)	11(12.9)	8(11.6)
42, 具体的な趣味	1(0.9)	0(-)	0(-)	4(5.6)	1(1.1)	2(2.0)	1(1.2)	1(1.4)
43, 趣味の発見	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	1(1.0)	0(-)	0(-)
44, 具体的スポーツ	6(5.4)	1(0.8)	0(-)	0(-)	2(2.2)	1(1.0)	1(1.2)	1(1.4)
45, スポーツの開始	0(-)	1(0.8)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	1(1.2)	1(1.4)
46, 料理	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)
47, ベット	2(1.8)	0(-)	0(-)	1(1.4)	3(3.3)	2(2.0)	0(-)	0(-)

5, 生活									
51, 結婚・家庭持つ	20(17.6)	60(46.9)	29(42.6)	56(76.7)	23(25.6)	50(49.5)	69(81.2)	64(92.8)	
52, 離婚	1(0.9)	0(-)	1(1.5)	2(2.8)	0(-)	0(-)	3(3.6)	2(2.8)	
53, 子供を持つ	4(3.6)	20(15.6)	8(12.0)	27(37.0)	4(4.4)	28(27.7)	40(47.1)	56(81.2)	
54, 家庭仕事の両立	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	
55, 自立一人暮らし	3(2.7)	10(8.0)	4(6.0)	7(9.6)	1(1.1)	8(7.9)	3(3.6)	3(4.3)	
56, 海外生活	2(1.8)	1(0.8)	2(3.0)	4(5.6)	2(2.2)	5(5.0)	1(1.2)	1(1.4)	
57, 家を建てる	4(3.6)	3(2.4)	7(10.5)	11(15.1)	4(4.4)	2(2.0)	19(22.4)	11(15.9)	
58, DINKS	0(-)	1(0.8)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	
59, 引っ越し	0(-)	3(2.4)	1(1.5)	0(-)	0(-)	0(-)	4(4.8)	1(1.4)	
50, 孫を持つ	0(-)	3(2.4)	0(-)	4(5.6)	0(-)	0(-)	2(2.4)	3(4.3)	
6, 生きる態度・姿勢									
61, 幸福で楽しい生活	2(1.8)	3(2.4)	2(3.0)	2(2.8)	1(1.1)	1(1.0)	2(4.8)	1(1.4)	
62, 一生懸命の生活	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	1(1.2)	1(1.4)	
63, 平穏・安定な生活	2(1.8)	1(0.8)	1(1.5)	1(1.4)	1(1.1)	1(1.0)	0(-)	0(-)	
64, きちんとした生活	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	
65, 納得のいく人生	0(-)	1(0.8)	0(-)	0(-)	1(1.1)	0(-)	1(1.2)	1(1.4)	
66, お金持ちになる	1(0.9)	6(4.8)	6(9.0)	1(1.4)	1(1.1)	2(2.0)	0(-)	0(-)	
67, 宝くじ・ギャンブル	3(2.7)	6(4.8)	6(9.0)	2(2.8)	4(4.4)	2(2.0)	1(1.2)	1(1.4)	
68, プー太郎フリーター	0(-)	0(-)	3(4.5)	1(1.4)	2(2.2)	1(1.0)	1(1.2)	1(1.4)	
69, 有名(芸能人)になる	7(6.3)	3(2.4)	6(9.0)	2(2.8)	0(-)	2(2.0)	1(1.2)	1(1.4)	
6A, 有名人(芸能人)との関わり	0(-)	8(6.4)	0(-)	0(-)	0(-)	4(4.0)	1(1.2)	1(1.4)	
6B, 宗教的生活	1(0.9)	0(-)	0(-)	0(-)	2(2.2)	0(-)	0(-)	0(-)	
6C, 幸福な老後	0(-)	4(3.2)	3(4.5)	4(5.6)	1(1.1)	1(1.0)	2(2.4)	9(13.0)	
6D, 社会貢献ボランティア	0(-)	3(2.4)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	
6E, 精神的成長	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	2(2.2)	0(-)	0(-)	0(-)	
6F, 悟り真実の追求	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	
6G, アルバイト	1(0.9)	5(4.0)	0(-)	0(-)	0(-)	2(2.0)	0(-)	0(-)	
7, 健康一病気									
71, 健康	1(0.9)	0(-)	0(-)	1(1.4)	0(-)	1(1.0)	0(-)	0(-)	
72, 怪我・病気	1(0.9)	1(0.8)	1(1.5)	1(1.4)	1(1.1)	0(-)	4(4.8)	5(7.2)	
73, 身体的変化・ダイエット	3(2.7)	8(6.4)	0(-)	2(2.8)	1(1.1)	2(2.0)	0(-)	0(-)	
8, 社会事変									
81, 社会事変	4(3.6)	2(1.6)	1(1.5)	1(1.4)	8(8.8)	2(2.0)	0(-)	0(-)	
9, 死									
91, 自分の死	14(12.3)	8(6.4)	10(15.2)	6(8.2)	12(13.3)	8(7.9)	28(32.9)	23(33.3)	
92, 自殺	0(-)	1(0.8)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	0(-)	
0, その他									
01, 分類不能	17(15.0)	11(8.6)	11(16.2)	12(16.4)	13(14.4)	15(14.9)	25(29.4)	22(31.9)	

に高校3年では現在の高校の卒業に関する記述が多い。また、進学や就職の記述を中心にしながらも「アルバイト」や「旅行」、「スポーツ」などの記述や「芸能人になる」というような記述もみられる。男女間には主に子どもを持つことの記述に差異がみられ、男子では自分の子どもに関する記述はほとんどみられないが、女子においてはそうした記述が高校2年、3年で大きく増加する。

一方、大学生では高校生で中心を占めた「進学」の記述が減少し、男子・女子に共通して「卒業」「就職」「結婚・家庭を持つ」「子どもを持つ」ことの記述が中心となった。男子においても「子どもを持つ」ことの記述の増加が確認される。また、この時期の特徴は就職後の具体的な記述が見られるようになることであり、男子では「出世」「退職」、女子においても「退職」やその後の「再就職」の記述が確認される。また、「身近な人間の死」や「自分の死」という、死に関する記述が増加し、10個のイベント回答欄の最後が死で終結させられることが多くなった。これら報告された未来のイベントの内容は、人生80年テスト（未来版）³⁾の回答の発達の分析を行った高橋（1988）、模擬的自叙伝（mock autobiography）⁴⁾の内容の発達的変化を検討した園田（1991）らの結果と一致するものである。

次に、これらの未来のイベントに基づいて未来展望の広がり（extension）についての検討を行った。未来展望の広がり（extension）の指標として先行研究に基づき①未来のイベントの生起年齢の最大値、②生起年齢の平均、そして③報告されたイベントの数という3種の変数を個人ごとに求め、それに対して学年×性の二元配置の分散分析を試みた（TABLE.3とTABLE.4）。その結果、①生起年齢の最大値に関しては学年の主効果が有意（ $F=45.28$, $df=3/684$,

3) 人生80年テスト（未来版）は、被験者の現在の年齢から80歳までの各年齢について「〇歳の時私は…」という刺激文に対して回答させ、その自由記述を分析する文章完成法の一つである。

4) 模擬的自叙伝とは、被験者の回答した未来計画に関する自由記述式の手記を分析する手法である。

$p < .001$) となり, LSD 法 ($p < .05$) による学年の多重比較の結果では, 他の 3 群に比して大学生の得点が有意に高いことが確認された。②生起年齢の平

TABLE. 3 LOC 尺度, 時間的展望尺度, 学校適応尺度の平均 (男子)

	高 1	高 2	高 3	大学
LOC	75.4(12.2)	74.4(12.2)	75.4(17.9)	76.6(15.6)
生起年齢最大	27.5(22.6)	32.0(20.8)	29.2(18.7)	47.1(23.9)
生起年齢平均	23.0(12.3)	25.1(11.6)	22.6(8.4)	32.3(7.2)
出来事数	2.8(2.2)	3.9(2.4)	3.0(2.4)	5.0(2.7)
目標遂行期待	8.0(2.4)	7.5(2.3)	8.0(2.6)	7.8(2.4)
目標道具性	15.7(4.2)	16.3(4.2)	16.2(5.1)	15.6(4.5)
目標志向性	11.7(3.2)	12.1(3.5)	12.2(4.2)	11.2(3.9)
希望	11.0(3.1)	10.8(3.0)	10.9(3.4)	11.7(3.2)
現在充実感	12.3(3.6)	10.6(3.1)	10.4(3.8)	12.1(4.3)
学校適応	59.8(11.1)	57.2(9.3)	60.7(15.3)	—

注) ()内は標準偏差。

TABLE. 4 LOC 尺度, 時間的展望尺度, 学校適応尺度の平均 (女子)

	高 1	高 2	高 3	大学
LOC	74.7(12.1)	71.1(13.9)	76.1(12.9)	77.8(11.1)
生起年齢最大	27.9(19.7)	30.1(15.8)	28.4(16.4)	51.7(26.1)
生起年齢平均	22.5(8.3)	22.0(5.3)	22.0(5.3)	32.4(7.4)
出来事の数	3.5(2.5)	4.6(2.4)	3.4(2.3)	5.8(2.6)
目標遂行期待	7.2(2.3)	7.1(2.4)	8.3(2.4)	8.3(2.0)
目標道具性	16.0(4.2)	15.5(5.0)	18.2(4.0)	17.4(4.7)
目標志向性	12.3(3.6)	11.5(4.1)	13.6(3.7)	13.1(4.1)
希望	11.3(2.8)	10.5(3.1)	11.7(3.0)	12.5(2.6)
現在充実感	11.6(3.8)	11.5(3.9)	11.5(3.4)	13.6(3.4)
学校適応	58.5(10.4)	56.1(13.2)	63.5(11.9)	—

注) ()内は標準偏差。

均に関しても同様に学年の主効果のみが有意 ($F=45.28$, $df=3/684$, $p<.001$)であり、多重比較の結果においても他の3群に比して大学生の得点が有意に高いことが確認された。③報告されたイベントの数に関しては、学年・性の主効果が有意となった(順に、 $F=35.72$, $df=3/684$, $p<.001$; $F=10.97$, $df=1/684$, $p<.001$)。そこで、学年・性それぞれの要因に関して一要因の分散分析を行った結果、学年の要因の多重比較に関しては、高校1年、高校3年に比して高校2年の目標数が多く、また高校1年、高校2年、高校3年に比して、大学生の目標数が有意に多いものであった。性の要因に関しては、男子に比して女子の方の目標数が有意 ($t=2.89$, $df=725$, $p<.01$)に多いものであった。

さらに、未来の目標をどのように認知しているか、どのように意味づけているかという側面に関わる目標に対する遂行期待・道具性期待を問う項目に関しても同様に、学年×性の二元配置の分散分析を試みた。まず、目標に対する遂行期待に対しては、学年の主効果、および学年×性の交互作用が有意であった。それぞれの要因ごとに検討すると、まず学年の要因の多重比較では高校2年に比して大学生の得点が高く、また高校1年、高校2年に比して高校3年の得点が有意に高いことが確認された。また、交互作用の内容を検討するために男子・女子別に学年の要因の多重比較を行ったところ、男子の被験者においては学年の効果がみられず ($F=0.73$, $df=3/355$, $n.s.$)、女子のみにおいて学年の主効果が確認され ($F=7.30$, $df=3/370$, $p<.001$)、高校3年と大学生の女子の得点が高校1年、高校2年に比して高いものであることが確認された。

一方、目標に対する道具性に関しては、学年・性の主効果、および学年×性の交互作用が有意となった(順に、 $F=3.73$, $df=3/684$, $p<.05$; $F=6.90$, $df=1/684$, $p<.01$; $F=3.44$, $df=3/684$, $p<.05$)。まず、学年の要因の多重比較では、高校1年、高校2年に比して高校3年の得点が有意に高く、性の要因では男子に比して女子の得点が高かった ($t=2.59$, $df=725$, $p<.01$)。また、交互作用の内容を検討するために男子・女子別に学年の要因

の多重比較を行ったところ、男子の被験者においては学年の効果がみられず ($F=0.44$, $df=3/355$, n.s.), 女子のみにおいて学年の主効果が確認され ($F=6.83$, $df=3/370$, $p<.001$), 高校3年と大学生の女子の得点が高校1年, 高校2年に比して高いものであった。

時間的展望体験尺度における希望尺度と目標志向性尺度に関しても、学年ごとの平均を求め、学年×性の二元配置の分散分析を試みた。その結果、目標志向性尺度に関しては、学年・性の主効果、および学年×性の交互作用が有意となった(順に、 $F=2.82$, $df=3/684$, $p<.05$; $F=8.42$, $df=1/684$, $p<.01$; $F=3.16$, $df=3/684$, $p<.05$)。それぞれの要因ごとに検討すると、まず学年の要因の多重比較では他の3群に比して高校3年の得点が有意に高く、性の要因では男子に比して女子の得点が高かった ($t=2.92$, $df=725$, $p<.01$)。そして、交互作用の内容を検討するために男子・女子別に学年の要因の多重比較を行ったところ、男子の被験者においては学年の効果がみられず ($F=1.12$, $df=3/355$, n.s.), 女子のみにおいて学年の主効果が確認された ($F=5.90$, $df=3/370$, $p<.001$)。一方、希望性尺度に関しては、学年の主効果のみが有意 ($F=5.55$, $df=3/726$, $p<.001$) となり、多重比較の結果、高校2年に比して高校3年の目標数が多く、また高校1年, 高校2年, 高校3年に比して、大学生の得点が有意に高いものであった。

こうして未来展望に関する様々な変数の学年的な推移を検討した結果、全体として高校1年と高校2年における未来展望の変化はほとんど統計的に有意に至らず、高校2年と高校3年、および高校3年と大学生の差異が有意となるという結果が多く得られた。

LOCと未来展望の関連 LOC尺度の得点に関して、学年×性の二元配置の分散分析を試みたが、主効果、交互作用ともに有意ではなかった。そして、LOC得点と未来展望の各変数との間の相関を学年ごとに算出した。その結果は男子でTABLE.5、女子でTABLE.6に示されている。

未来のイベントに基づいて得点化した①未来のイベントの生起年齢の最大値、②生起年齢の平均、そして③報告されたイベントの数という3種の変数

に関しては、LOC との相関はほとんどの組み合わせにおいて有意ではなかった。唯一、女子の②生起年齢の平均との間に有意な相関がみられるが、それは $r = -.24$ という弱い相関であった。

目標に関する期待である道具性期待と遂行期待との関連を検討すると、まず、目標に対する遂行期待に関して、男子では高校1年では $r = .15$ 、高校2年では $r = .38$ 、高校3年では $r = .59$ 、大学生では $r = .63$ と学年とともに相関

TABLE. 5 LOC と時間的展望尺度の相関 (男子)

	高1	高2	高3	大学
生起年齢最大	-.02	-.23	-.10	-.03
生起年齢平均	-.14	-.22	.03	-.20
出来事の数	-.08	-.01	-.19	-.18
目標遂行期待	.15	.38**	.59**	.63**
目標道具性	.27*	.27	.54**	.43**
目標志向性	.28*	.26	.63**	.51**
希望	.35**	.56**	.70**	.69**
現在充実感	.47**	.27	.63**	.62**

注) + $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

TABLE. 6 LOC と時間的展望尺度の相関 (女子)

	高1	高2	高3	大学
生起年齢最大	-.16	-.10	-.03	.11
生起年齢平均	-.24*	-.04	.03	-.17
出来事の数	.02	-.01	.10	-.10
目標遂行期待	.34**	.22	.47**	.29*
目標道具性	.27*	.28*	.48**	.48**
目標志向性	.30**	.36**	.49**	.44**
希望	.44**	.43**	.51**	.49**
現在充実感	.38**	.31*	.37**	.38**

注) + $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

係数が上昇する傾向が確認されるが、女子ではそうした直線的な上昇は確認されず、高校3年の被験者において $r = .47$ という頂点を示していた。一方、目標に対する道具性期待に関しては男子・女子共に傾向は類似しており、高校1年・高校2年の被験者と高校3年・大学生の被験者の間に隔たりがあり、高校3年以降にLOCと目標の道具性期待との関連が一層高くなる傾向を確認することができた。

時間的展望体験尺度に関して、まず目標志向性尺度に関しては、高校1年・高校2年と高校3年・大学生の被験者間に大きな隔たりがあり、前者の被験者ではLOCとの相関係数が $r = .40$ 未満の弱い相関であるが、後者の被験者では $r = .40$ から $r = .60$ 程度の中程度の相関となっている。こうした学年的な変化は女子に比して男子の方が顕著であった。一方、希望性尺度に関しては、男子では高校1年($r = .35$)高校2年($r = .56$)と高校3年($r = .70$)・大学生($r = .69$)というように、高校3年を頂点として学年とともに相関係数が上昇する傾向がみられるが、女子ではどの学年でも $r = .50$ 程度であり、学年による差異は確認されなかった。なお、こうしたLOCと時間的展望体験尺度における未来尺度との相関係数は、現在尺度である現在充実感尺度に比しても高いものであり、LOCという未来の成果獲得に関する一般的期待が未来次元の認知の仕方と関連が高いことを示唆している。

未来展望と学校適応の関連 最後に、未来展望の各尺度と高校生の学校適応尺度得点との関連を検討した。学校適応尺度に関して平均値を求め、学年×性の二元配置の分散分析を試みたところ(TABLE.3とTABLE.4)、学年の主効果のみが有意($F = 8.81$, $df = 2/570$, $p < .001$)となり、多重比較の結果、高校3年の得点が高校1年、2年に比して高いことが確認された。そして、未来展望の各変数と学校適応尺度得点の相関を学年ごとに算出した(TABLE.7とTABLE.8)。

まず、未来のイベントの報告に基づく3つの変数、①未来のイベントの生起年齢の最大値、②生起年齢の平均、そして③報告されたイベントの数という3種の変数に関しては学校適応尺度との相関はほとんどの学年において有

TABLE. 7 時間的展望と学校適応の相関（男子）

	高 1	高 2	高 3
生起年齢の最大値	-.02	-.03	.13
生起年齢の平均	-.06	-.05	.19
出来事の数	.22*	-.01	-.07
目標遂行期待	.43**	.48**	.67**
目標道具性	.56**	.55**	.71**
目標志向性	.38**	.42**	.65**
希望	.35**	.44**	.66**
現在充実感	.33**	.12	.54**

注) + $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

TABLE. 8 時間的展望と学校適応の相関（女子）

	高 1	高 2	高 3
生起年齢最大	.08	.01	-.02
生起年齢平均	-.03	-.03	-.01
出来事の数	.24*	.15	.02
目標遂行期待	.49**	.59**	.53**
目標道具性	.61**	.58**	.62**
目標志向性	.50**	.48**	.60**
希望	.34**	.35**	.46**
現在充実感	.34**	.46**	.33**

注) + $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

意ではなかった。唯一、高校1年においては③報告されたイベントの数が学校適応尺度との間に有意な相関係数を示しており、その傾向は男女に共通しているが、その値は $r = .20$ 程度の弱い相関であった。

一方、目標に関する遂行期待および道具性期待は、各学年において、学校適応尺度との有意な相関係数を示した。この関連の様相に関して、女子ではあまり学年による差は確認できないが、男子では学年の上昇に伴い目標に関

する遂行期待および道具性期待が学校適応と高い関連性を持つ傾向が示された。特に高校3年の被験者における関連が特に高く、この時期の青年においては、目標を未来と関連づけて考えること、およびその目標を達成可能ととらえることが学校生活での適応と強いつながりを持つことを示唆する。

時間的展望体験尺度に関しても、各学年において学校適応尺度との相関係数が有意になった。この関連に関しても上述の目標への期待の結果と同様に、女子ではあまり学年による差は確認できないが、男子では学年の上昇と共に相関係数が上昇する傾向がみられる。ただし、高校3年の被験者に関しては男女に共通して特に高い相関を示していた。現在尺度と未来尺度とを比較すると、男女共に学校適応尺度との関連は、現在尺度よりも未来に関する2尺度の方が全般的に高い傾向を示しているが、学年の上昇につれてさらにそうした傾向が高まることを確認することができる。このことは、年齢の上昇と共に、現在のみならず未来がその個人の現在の適応を規定する要因として重要になってくることを示すものと考えられる。

全体的考察

本研究では、青年の未来展望の発達に関して、その予想されるイベントの内容や態度、人格変数（LOC）との関連、および適応変数（学校適応）との関連という観点から、高校1～3年および比較のための大学生に横断的調査を実施した。

まず、未来展望の内容的側面、すなわちどのようなイベントを未来に予想しているかを検討したところ、高校生では学年の上昇につれて卒業—進学—就職という経路に関わる記述が増加する傾向がみられた。そして、それらの生起する年齢予測の平均は25才程度、さらに最大値に関しても30才前後のものであり、こうした結果から、高校生が関心を示しているのが時間的に近接した事象であることが示唆される。一方、大学生においては卒業—就職という「職業生活に関わる」経路と、結婚—子どもを持つという「家庭生活

に関わる」経路の2つが中心となり、さらに前者は退職や再就職というかなり先のイベントにまで及び、後者に関しても自分の死や配偶者の死まで記述されるようになる。また、イベントの生起する年齢の平均についても大学生では30才以上、さらに年齢の最大値についても50才前後のものとなっていることから、この時期においては展望が人生の後半にまで拡大されることが推測される。さらに未来展望の広がり指標として、未来のイベントに基づいた3種の変数を設定したところ、同様に大学生の被験者においてこれらの得点が特に高いことが確認された。また、未来の目標をどのように認知しているか、またはどのように意味づけているか、また未来に対してどのような態度を持っているのかという側面に関しても高校1年、高校2年と高校3年、大学生との差異が有意となることが多かった。こうしたことから、この側面に関しては、高校2年から高校3年の間に未来に対する認知のあり方に重要な変化が生ずることが推測される。

人格変数としてのLOCとの関連、および適応変数としての学校適応尺度との関連については、未来展望の広がりに関する3尺度はほとんどそれらと関連を持たず、一方、未来の目標への認知や、未来に対する態度的側面に関わる時間的展望体験尺度は高い関連を示した。未来展望の測度として、これまで広がりという側面が多く検討されてきたが、人格変数や適応変数との関連という側面からみれば、それは一次的な意味をあまり持たないことが示される。個人の生活空間において枠組みとして重要な意味を持つのは、むしろそれらのイベントをどう認知するか、どう意味づけをするかという側面であることが本研究の結果から示されたといえよう。また、こうした要因との関連の様相では、関連性が全体的には学年とともに上昇する傾向がみられ、特に高校1年、高校2年に比して、高校3年以降の上昇が特徴的であった。こうした結果は、年齢の上昇につれてLOC信念に基づいた未来展望の形成がなされ、それが個人の生活空間に組み込まれて、現在の適応を規定する要因として重要になってくる過程を示唆するものと考えられる。こうした結果は人格変数、適応変数と未来展望の関連についての推測とほぼ一致するもので

あった。

このように本研究においては、未来展望の広がり の側面に関しては大学生になってから大きく拡大されること、および未来の目標の認知や未来への態度、意味づけの側面、LOCとの関連、そして学校適応との関連においては高校2年から3年の時期が重要な意味を持つことが示唆された。調査対象者である高校生にとって、この時期は就職か大学進学かという進路を決定する時期である。特に中学から高校・高等専門学校への進学率が9割以上を示すわが国においては、この高校卒業という事態は初めて自身の進路決定を社会から要求される機会であると考えられる。この点に関して塚野(1996)は、わが国の中学・高校生を対象に受験に関わる心理的圧力が現在の適応に及ぼす影響を検討しており、その結果、受験から受ける圧力は中学生よりも高校生の方がはるかに大きく、そして現在の生活を積極的に認識し未来を展望しようとする意識が、大学への合格可能性や受験的圧力の否定的な影響を受けていることを報告している。合格可能性を低くとらえ受験的圧力を強く受けている被験者は、自分の過去の生活に固執し、未来の生活を展望しない傾向を示していた。本研究の被験者においても、こうした受験への不安のために未来への展望が受験の時期に停滞していることが推測される。受験から解放された大学生になった時点で、未来展望の広がり は人生全体を覆うように延長されていくのであろう。

また、未来展望とLOCや学校適応との関連が高校3年という時期において非常に高かった結果の背景にはこの時期の自己認知と未来展望の再編成の過程が考察される。先述のように青年期における発達課題の一つは、自分自身の理想と現実を調整していくことであり、高校卒業後の自身の進路を決定し未来展望を形成していくという作業は、そうした発達課題に深く関わるということが推測される。未来展望の発達を規定する要因として、Klineberg(1967)は、新しい役割期待、ポジティブな同一性の形成を挙げ、Trommsdorff(1983)は社会化(socialization)を挙げている。また近年、進路選択に及ぼす自己効力感や自己概念の役割が重視され(Hackett & Betz, 1981; Taylor & Betz,

1983), それらが進路の決断・未決断やそれに関わる実際の活動に対して大きな影響力を持つことが確認されている。同時に, 進路選択の過程において自己概念の明確化やアイデンティティ形成が進行することを示唆する報告もある(浦上, 1996)。このように, 特に受験や就職という場面においては, 青年の未来展望の形成は自己概念を再編成する過程と深く関わり, 未来に対する計画や展望はそうした過程において直面する課題の困難度と自身の対処能力の認知との関係性を反映しながら, より高い現実性を持つものへと発展すると考えられる。本研究で高校3年という進路選択の時期において, LOCが未来展望と密接な関連を持ち, 学校適応とも高い関連を示したという結果が確認されたことは, こうした自己認知に基づいて未来展望の構造化が進行していく過程を反映していると解釈することができるのではないだろうか。

以上のように, 本研究では未来展望の発達の变化, およびそれとLOCや学校での適応感との関連性を検討し, 未来展望の広がりや大学生になって急激に延長されること, および未来展望とLOC, 現在の適応との関連が高校3年という時期において高まるという結果が得られ, これらの結果を大学受験に対する不安, 進路選択過程における自己概念と未来展望の再編成という観点から考察した。今後はこうした受験圧力や自己認知と未来展望形成の関わりの過程をより詳細に検討するために, 縦断的な追跡調査を行う必要があるだろう。

謝 辞

本研究のデータの収集には, 白梅学園短期大学1995年度卒業生, 石川香織さん, 入佐明里さん, 金子奈穂美さん, 佐藤千恵さん, 鈴木真由美さん, 丸山裕子さんのご協力を頂きました。記して感謝を申し上げます。

引用文献

Cottle, T.J., & Klineberg, S.L. 1974 *The present things future: Explora-*

- tions of time in human experience.* New York: Free Press.
- Hacketts, G., & Betz, N.E. 1981 A self-efficacy approach to the career self-efficacy in the career exploration process. *Journal of Vocational Behavior*, **35**, 194-203.
- 日高三喜夫・吉田昭久 1980 Time Perspective 研究の概観 茨城大学 教心・異教・職指学科 教育心理と近接領域, **5**, 83-94.
- 表谷真知子 1994 青年の時間的展望と個人的目標についての調査 1993年度立教大学心理学科卒業論文 (未公刊).
- Klineberg, S.T. 1967 Changes in outlook on the future between childhood and adolescence. *Journal of Personality and Social Psychology*, **7**, 185-193.
- Lessing, E.E. 1968 Demographic, developmental, and personality correlates of length of future time perspective (FTP). *Journal of Personality*, **38**, 183-201.
- Lessing, E.E. 1972 Extension of personal future time perspective, age, and life satisfaction of children and adolescents. *Developmental Psychology*, **6**, 457-468.
- Lewin, K. 1942 *Time perspective and morale.* New York: Houghton Mifflin. (末永俊郎訳 1954 社会的葛藤の解決 東京創元社).
- 水口禮治 1984 人格構造の認知心理学的研究 —Locus of Control (統制の所在性) に関する疎—密仮説の提唱と検証— 風間書房.
- 望月葉子・中島史明・大根田充男 1992 年齢規範の観点からみた青年の将来展望に関する研究 —予期された標準的なライフサイクルと職業生活設計をめぐって— 発達心理学研究, **3**, 81-89.
- Neugarten, B.L. 1979 Time, age, and the lifecycle. *American Journal of Psychiatry*, **136**, 887-894.
- 西田博文 1976 現代社会と青年期の神経症的病理 —とくに病像の時代的変遷を中心に— 笠原嘉・清水将之・伊藤克彦(編) 青年の精神病理(1) 弘

文堂.

- Nuttin, J., & Lens, W. 1985 *Future time perspective and motivation: Theory and research method*. Leuven: Leuven University Press/LEA.
- Segner, R. 1992 Future orientation: Age-related differences among adolescent females. *Journal of Youth and Adolescents*, **21**, 421-437.
- Shannon, L. 1975 Development of time perspective in three cultural groups: a cultural difference or an expectancy interpretation. *Developmental Psychology*, **11**, 114-115.
- 白井利明 1985 児童期から青年期にかけての未来展望の発達 大阪教育大学紀要(第IV部門), **34**, 61-70.
- 白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, **65**, 54-60.
- 杉山成 1998 目標に対する期待と心理的適応の関連性 小樽商科大学人文研究, **95**, 49-63.
- 杉山成・神田信彦 1996 青年における一般的統制感と時間的展望 —アパシー傾向との関連— 教育心理学研究, **44**, 418-424.
- 角野善司 1993 大学生の個人的目標(2) 日本教育心理学会第34回大会発表論文集, 187.
- 高橋信行 1988 「人生80年テスト(未来版)」を通してみた児童の人生設計 道都大学社会福祉学部紀要, **11**, 25-61.
- 高橋克義・内藤勇次・浅川潔司・古川雅文 1986 青年期の環境移行と適応過程(1) 日本教育心理学会第28回大会発表論文集, 556-557
- Taylor, K.M., & Betz, N.E. 1983 Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, **22**, 63-81.
- Trommsdorff, G., Lamm, H., & Schmidt, R. 1979 A longitudinal study of adolescents' future orientation (time perspective). *Journal of Youth and Adolescence*, **8**, 131-147.

- 浦上昌則 1996 女子短大生の職業選択過程についての研究 一進路選択に対する自己効力, 就職活動, 自己概念の関連から一 教育心理学研究, **44**, 195-203.
- 塚野州一 1996 過去, 現在, 未来における自己の価値づけの変容過程とその規定要因の検討 風間書房.
- Verstraetn, D. 1980 Level of realism in adolescent future time perspective. *Human Development*, **23**, 177-191.